土佐路の白球

高知県高校野球史

高知県高等学校野球連盟発足50周年記念誌

発刊によせて

高知県野球協会会長
吉　村　真　一

このたび、「土佐路の白球」と題した高知県高校野球史が発刊される運びとなりましたことを心からお喜び申し上げます。ことしは県高野連が発足して50年の節目に当たりますが、そのときに県高校野球史が出版されることは誠に時宜を得た画期的な試みとして賛同を申し上げます。

これまでに県内では昭和47年に「熱球の譜」という本が出版されました。これは溝渕峯男、水口淥、前田祐吉氏の野球読み物が主内容でしたが、「野球史」と銘打った発刊書は高知では初めてで、野球関係者はもとより、野球ファンにとっても貴重な資料になると確信しています。

顧みますと、戦前の高知は野球の後進県で、甲子園出場は程遠い夢物語でしたが、終戦を境に形勢は一変しました。戦後の全国高校野球で第１号本塁打を放ったのは城東中の故大野一郎選手。また、プロ野球での戦後第１号本塁打は本県出身の故岩本章選手が打っており、それを皮切りに高知の野球は飛躍して全国レベルに到達。その後は大学、プロ野球界にも幾多の好選手が輩出し野球高知の地歩を固めました。

これもひとえに先人たちの血と汗による並々ならぬ労苦や実績、伝統のたまものと思われます。本書を読みますと、戦前の時代の流れを感じ、あるいは四国の強豪チームに惨敗した選手たちが屈辱から立ち直り奮起する息吹がひしひしと伝わって来ます。

また、戦後になって名門チームにのし上がった高知商、高知、土佐が数々の名勝負、好試合を展開。しのぎを削り合った激闘も肌に伝わって来ます。

さらに野球史の中には戦前、戦後の各年次ごとの出場選手名や、県内外試合で本塁打を放った選手名など、門外不出の貴重な高校野球の記録なども収録されており、懐かしい選手の顔触れ、名前も登場し、白球を追った青春時代の思い出がよみがえるかと思われます。

しかし、本県の高校野球は昭和60年に伊野商が選抜大会で優勝。同年に高知商の国体優勝を境に戦績が振るわず、近年は下向線をたどり低調で往年の勢いが影を潜めています。そんなときこそ、原点に立ち返って温故知新の例え通りに先人の歩んだ道のりを振り返りさらなる精進を願ってやまない次第です。

刊行にあたって

高知県高校野球連盟会長
森田　弘

本県高校野球のあゆみが集大成いたしました。

南国土佐の地に野球の種が蒔かれて以来、「野球の長所は人生のあらゆることが当てはまる」（神田順治）と申しますように野球を通じて沢山の方々が、よき師・よき先輩・よき友・よき後輩にめぐりあうことができ、かけがえのない思い出をつくり、野球に感謝していることと存じます。

高校野球の礎を築いた監督・部長・コーチをはじめとする指導者、それを継承する人々、忘れえぬあの一打・勝敗を分けた一投・ファインプレー、また甲子園における・高知市営球場等での活躍にかかわった選手達、数々のドラマがいっぱいあります。

高知の高校野球には、これらのことを振り返るに足りる過去が、期待と興奮が、喜びと思わぬ結果が私達の背後に蓄積されております。

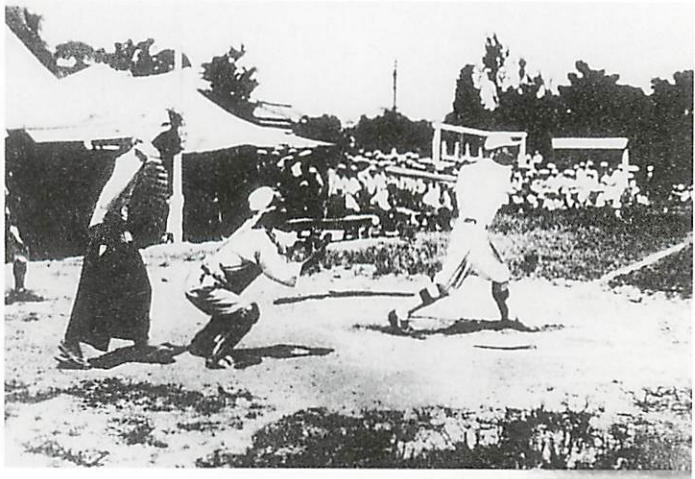
この本は、３Ｆ精神のもとでそれぞれのＴ(時)・Ｐ(場所)・Ｏ(場合)を演じた高校野球人の凝集であり、結晶であります。どうか本書をひもといて、人それぞれに青春を取り戻すこともよく、これからを期するのもよしと思います。そして、何よりも歴史が過去のものではなく将来のためにあることを今の高校野球に携わる者が肝に銘じて、日々の努力を積み重ねていくよすがとしなければなりません。

本書の出版にあたり多くの皆さんから資料を提供していただきました。厚くお礼を申し上げます。殊に高校野球の生き字引である高野連顧問の土居保夫さんには莫大な資料の整理から本文執筆の労をおとりいただきました。この間のご苦労は口ではいい表せないものがあります。深甚の敬意を表し、感謝を捧げるものであります。また、各大会の合間に校正に汗を流していただいた皆さんや装丁をはじめ何かとご教示たまわりました「飛鳥」の皆さんにも感謝を捧げるところです。

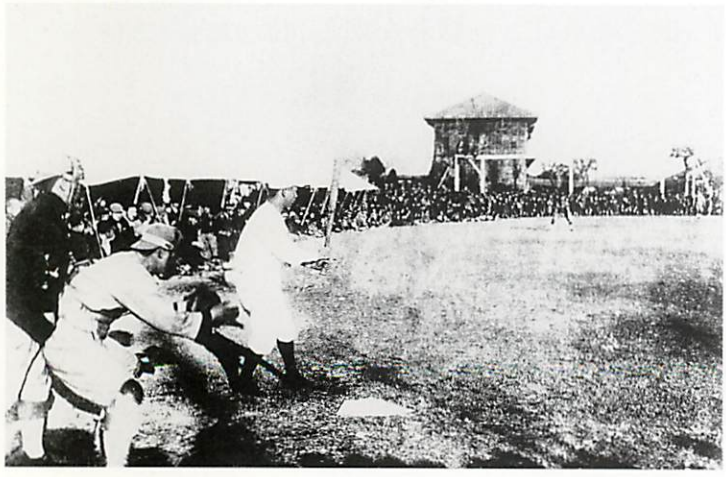
この本が野球という文化が発展するための一助となればと念願しながら刊行のあいさつとします。

大正時代に県内で開かれた野球試合

大正6年の年末、一中校庭で来高中の日本座劇団チームと初の対外試合が開かれる。対戦したのは県内の黒潮倶楽部チーム



大正時代の前期、野球の審判員は着物にはかま姿だった（高知一中校庭で）



大正時代の後期、野球服装も現代化し審判員もジャンパーを着用した（高知一中校庭で）

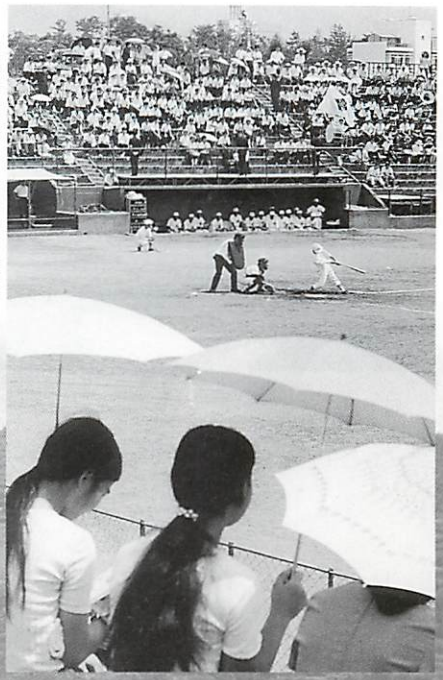
戦後50年　荒廃の球場から県勢が飛躍す

高知市営球場は昭和9年7月4日、現在地の高知市大原町に設置された。だが当時は土盛りのお粗末な球場だったが、27年6月4日に市が改修。グラウンドを補修、内野にスタンドを設置し現在の基盤が出来上がった。

この環境が長らく続いたが、50年には台風災害で球場が水浸しになる被害などがあった。その後部分的に補修を行った末、平成4年になって根本的に大改修。現在の立派な容姿に生まれ変わった。

毎年春夏に甲子園球場で開かれる選抜高校野球大会と全国高校野球選手権大会。それを目指し白球に夢をのせた球児たちのドラマが繰り広げられる。

一塁側ブルペンでピッチング練習をする城東中の前田祐吉投手



昭和40年代の高知市営球場

外野の塀がなく、打球は後方の市設プールまで転がった（グラウンド内は円陣を組む城東中ナイン）

右翼後方に並木、土盛りスタンドのあった高知市設球場（グラウンド内は昭和21年8月に開かれた全国中等野球大会四国予選）

県営春野球場

昭和54年10月10日オープンし、近年“高校野球”のメッカとして利用されている

屋根付きで〝ミニ甲子園〟と人気のある県営春野球場

危険防止のためラバー付きの外野塀もある県営春野球場

県営春野球場は昭和54年10月10日にオープンした。県が吾川郡春野町芳原、西分地区に48年から建設を進めていた県立春野総合運動公園（約45・6ヘクタール）の主施設の一つで、野球場の敷地は1万8千3百平方メートル。両翼91メートル、センター120メートル（グラウンドの面積は1万2千3百平方メートル）で当時としては四国一の施設を誇った。

内野、アルプススタンドは鉄筋コンクリート二階建てで、内野の中央部は屋根付き。収容能力は内、外野合わせて2万2千人と県内最大を誇り〝ミニ甲子園〟に似た施設と好評だ。

ここで高校野球がスタートしたのは昭和55年の春季四国大会代表決定戦からで、近年は高知市野球場に代わって〝高校野球のメッカ〟として利用されている。

高知市野球場

市営球場の名称で親しまれた球場が平成３年度の改修で高知市野球場（高知球場）として立派になった。

昭和50年代の高知市営球場

新装になった球場で行われるゲーム

高知市東部球場

平成2年に完成

秋に開かれる黒潮リーグに詰めかけた野球ファン

平成2年に完成した高知市東部球場

数々のドラマが繰り広げられる甲子園球場

輝かしい全国大会の優勝旗

数々の大会で最も権威のある全国高等学校野球選手権大会の優勝旗。この旗を手にするのは至難の技だ。この深紅の大優勝旗は昭和39年に高知高の優勝で初めて土佐路にはためいた。

昭和39年夏、高知高優勝のメダル

昭和53年夏、高知商高準優勝のメダル

※ただし昭和28年夏の土佐高準優勝時はメダルの授与はなし

球春に先駆けて開かれる選抜高校野球大会。この大会に県勢チームは優勝が３度、準優勝は５度も達成した。とりわけ、昭和50年には高知高、55年に高知商高、60年は伊野商高と５年周期で３度も紫紺の優勝旗を勝ち取った。

甲子園大会の優勝、準優勝メダル

県勢チームが選抜高校野球大会で血と汗の苦闘の末、勝ち取った優勝、準優勝のメダル

昭和32年選抜、高知商高準優勝のメダル

昭和41年選抜、土佐高準優勝のメダル

昭和42年選抜、高知高準優勝のメダル

昭和50年選抜、高知高優勝のメダル

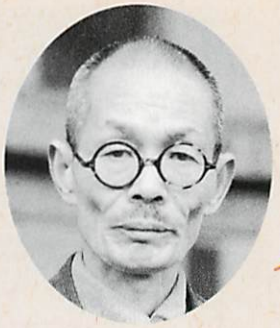
昭和52年選抜、中村高準優勝のメダル

昭和55年選抜、高知商高優勝のメダル

昭和60年選抜、伊野商高優勝のメダル

歴代会長

初代
久武猛彦
（県出納長）
昭和23～24年

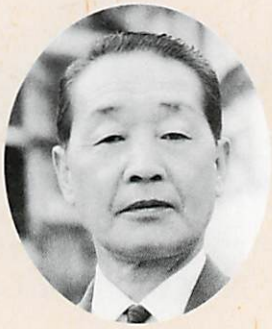


二代
大嶋光次
（土佐高校長）
昭和25～33年

三代
小松生幹
（高知工高校長）
昭和33～40年

四代
曽我部清澄
（土佐高校長）
昭和40～41年

五代
川島源司
（高知学園長）
昭和41～46年



六代
高石次郎
（高知学園長）
昭和46～49年

七代
川窪芳喜
（高知商高校長）
昭和49～52年

八代
田口信雄
（高知工高校長）
昭和52～55年

九代
沢良木庄一
（高知東高校長）
昭和55～59年

十代
寺内五男
（高知商高校長）
昭和59～62年

十一代
尾崎春寿
（高知高校長）
昭和62～平成２年

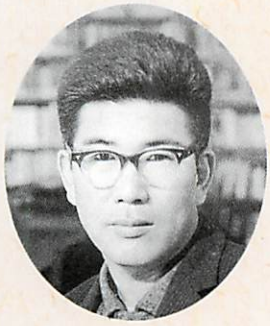
十二代
中村富和
（高知工高校長）
平成２年～４年

十二代
森田　弘
（高知商高校長）
平成４年～

歴代理事長

初代
邑田一郎
（県体育課長）
昭和23年

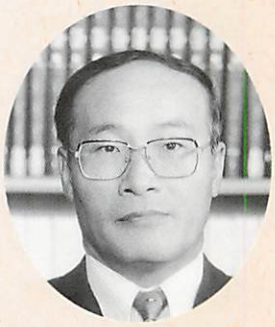
二代
松田　昇
（高知商高教諭）
昭和24年～39年



三代
山本直四郎
（土佐高教諭）
昭和39～54年

四代
浜田志郎
（高知工高教諭）
昭和54～57年

五代
池　仁造
（高知西高教諭）
昭和57～平成元年



六代
山本浩文
（土佐高教諭）
平成元年～

土佐路の白球　目次

歴史編……1

野球伝来から

明治22年……2
大正4・5年……4
大正6年……5
大正7年……6
大正8年……7
大正9年……8
大正10年……11
大正11年……12
大正12年……14
大正13年……15
大正14年……17
大正15年……20
昭和2年……22
昭和3年……24
昭和4年……27
昭和5年……30
昭和6年……34
昭和7年……38
昭和8年……42
昭和9年……47
昭和10年……54
昭和11年……59
昭和12年……64
昭和13年……70
昭和14年……75
昭和15年……81
昭和16年……86
昭和17年……89

舞いあがった白球

昭和21年……92
昭和22年……99
昭和23年……109
昭和24年……120
昭和25年……129
昭和26年……141
昭和27年……152
昭和28年……162
昭和29年……176
昭和30年……191
昭和31年……203
昭和32年……212
昭和33年……226
昭和34年……242
昭和35年……257
昭和36年……270
昭和37年……285
昭和38年……300
昭和39年……314
昭和40年……331
昭和41年……347
昭和42年……366
昭和43年……387
昭和44年……405
昭和45年……424
昭和46年……441
昭和47年……460
昭和48年……482
昭和49年……502
昭和50年……524
昭和51年……547
昭和52年……569
昭和53年……596
昭和54年……621
昭和55年……647
昭和56年……670
昭和57年……692
昭和58年……717
昭和59年……745
昭和60年……769
昭和61年……800
昭和62年……825
昭和63年……846
平成元年……868
平成2年……890
平成3年……911
平成4年……930
平成5年……949
平成6年……968
平成7年……984

記録編……991

内村氏が生徒に手ほどき 高知での野球の始まりは 明治22年

高知への野球伝来

日本に野球が伝わったのは明治６年（1873年）だといわれている。開成学校（現在の東京大学）に赴任してきたアメリカ人教師ホレエス・ウイルソンが学生たちに野球を教えたのが野球渡来の始まりという。その後、野球は隆盛の一途をたどり明治23年ごろから一高の黄金時代、次いで37年からの早慶時代、大正年間になると大学ばかりでなく中等学校にも普及してきた。

この野球が高知県に伝わってきたのは明治36、7年ごろだと戦前の野球に詳しい故井上勝喜氏（元高知新聞記者）は昭和26年版の高知県史に記している。

しかし、実際に本県に伝わってきたのはそれ以前と思われる興味のある貴重な資料が出てきた。昭和４年発行の県立城東中創立50周年記念号の中の一文によると「城東中（当時は尋常中学校）の運動場で初めてバットの音がし出したのは明治23年の春と思う。札幌農学校出の内村達三郎氏（農学士で内村鑑三氏の弟）を英語の先生として御迎えして間もなしのころで、野球の手ほどきは実に先生である」と明治25年卒業の坂出鳴海氏（元大阪市都市港湾部長、工学士）は思い出を語っている。

だが追手前高の「高知中学校以来職員任免一覧」によると、内村達三郎氏（本籍東京）は明治22年３月に英語・博物の教諭心得に任ぜられ、同23年２月に依願免職となっている。このため、内村氏が生徒に野球の手ほどきをしたのは22年春が正しいと思われる。

内村鑑三氏の長男、故内村祐之氏は一高、東大の黄金時代を築いた往年の名投手で、元プロ野球コミッショナー。この内村家の係累に野球の手ほどきを受けたことは高知にとって誇り高いものになった。

また、明治年間の野球について昭和６年の土陽新聞に「高知野球史」と題する興味深い一文がある。野球部が初めて県立第一中学（現追手前高）に創立されたのは明治35年ごろと記している。

それによると、大阪から一中に転校してきた生徒に刺激されて中川喜義（大東漁業）辻琢磨（土佐セメント）らが革のボールを投げ合っていたといわれる。そして北野中より上村信照（東京・歯科医）学習院より岩村男爵の子息、岩村有助（高千穂真珠）岸和田中より小島栄枝（のち早大野球部）らが転校。中川、辻らと部を創設したという。

正式に９人のメンバーをそろえたのが明治35年で、部長は県庁土木課にいた横川成正氏。部費は１カ年が50円だった。翌年、静岡中から岡林二塁手が転校して来てからチームが充実したといわれる。

第一中学に野球部が誕生すると、当時対立していた県立第二中学（現小津高）にも野球部ができ、両校が度々試合をやったという。第二中学は力不足だったが、一時は丸亀中から転校してきた橋本投手がいた時には活躍し好試合をした。だが彼らが長くいなかったため第二中学は次第に下降線をたどった。

県内に強い相手がいないため、第一中学は明治35年に高松中との試合に遠征。翌36年には京都遠征に出かけた。

最初は京都一中と対戦し17－０で大敗。翌日は京都一商に７－０で敗退。大阪に回って天王寺中にも８－７で負け、帰りに９－６で徳島中に勝ち留飲を下げたという。

京都一商とは対戦後に茶話会を開いたが、京都側は高知の選手は気が荒いのでけんかになると思い、ひそかに生徒を集めていたという逸話が残っている。

その後、明治41年６月には高知一中グラウンドで海南中学スワロー倶楽部と高知一中の試合が行われ、高知一中が48－８で大勝した記録が残っている。

だが高知一中以外のグラウンドを持たない他校は次第に野球熱が下火となった。また、高知一中も校舎のガラスを破り、屋根がわらを割る今でいう野球公害が重なり苦情が出て明治43年に野球部を休部した。

大正4・5年（1915・1916年）

全国大会始まるが県勢は出場せず

大正年代になると全国的に野球熱が一段と高まりを見せ、大正４年には第１回全国中等学校優勝野球大会が始まった。地区予選となる四国大会は８月６日から８日まで香川商グラウンド（現高松商校庭）で開かれたが、当時は高知からの出場校はまだなかった。

四国大会設立のいきさつは地元香川県に残された資料によると、当時高松中学ＯＢで組織されていた高松体育会が当時の朝日新聞高松通信部より相談を受けて開催準備に協力することになったという。

当初は四国と山陽で地元予選を行う予定だったが、四国の独立を主催者に申し入れ「二県以上が参加すれば独立を認める」ということで他県にも参加を呼びかけた。だが愛媛、高知からの参加はなく、第１回大会は香川県から５校、徳島県から３校、合わせて８校が参加して開かれた。

前年から始まった全国大会開催の朗報は高知県内の中学生にも喜びを与え、大きな刺激となった。野球部を解散していた県立一中も大正５年に部費50円で野球部を復活。公式戦には出なかったものの、来たるべき日に備えて野球への情熱をたぎらせていた。

県内で初めて対外試合が行われる 来高中の劇団チームと中学OB連

大正６年には県内で初めての対外野球試合が開かれ、初めて野球を見ようという人たちが物珍しさに会場に詰めかけ大勢の見物客でにぎわった。

この年の暮れ、当時小説家の佐藤紅緑氏が率いる日本座という劇団が阪神地方を経て12月26日に来高、年末から年始にかけて巡業にやって来た。劇団内に俳優などで組織した野球チームがあり、公演の合間に相手チームを探していることを聞いて県内の野球好きが挑戦に応じ交歓試合を開いた。

対戦したのは高知の中学生ＯＢ連中で、黒潮倶楽部と銘打って12月28日、県立一中校庭で俳優軍と対戦した。俳優軍はユニホームに日本座のイニシアルをあしらったＮの字をつけ、女優が声援するというので一中校庭は時ならぬにぎわいを見せた。

県内チームには平山昌雄、井上勝喜、大倉増純らがいたが、技量未熟のため試合は俳優軍が大勝。ゲームは翌年、１月13日ごろの最終試合まで度々行われたが、黒潮倶楽部は全敗したという。

この年、大正６年には県立三中（現安芸高）にも野球部が結成され、県内にも野球ブームがまん延した。

来高中の日本座と県内では初めての対外野球試合を開く。当時珍しかった野球試合に加え、女優も応援に来ると伝え聞いて師走の寒風にもめげず「とんび」をまとった観衆が大勢詰めかけ試合を見入る。

大正7年（1918年）

一中校庭で県内初の野球大会開く

大正７年になると４月に高知工。９月には高知商も故川村晋一郎氏らが学校側に懇願して野球部結成にこぎつけ、県内で続々と野球部が誕生。県内チームも試合相手に事欠かぬようになってきた。

この当時、既にチームづくりが仕上がっていた県立一中は１月から６月にかけて黒潮倶楽部と対戦していたが、これに刺激されてか７月24、5の両日、県立一中グラウンドで県下では最初の記念すべき野球大会が開かれた。

参加チームは県立一中、高知工、若葉クラブ（高知商生徒）の学生チームと一般の黒潮倶楽部、東京在学中の帰省学生で結成した烏合（ウゴウ）倶楽部の５チームだった。２日間にわたって熱戦を展開。県立一中と高知工の間で決勝戦が行われ、県立一中が20－２で高知工を下し初の県下制覇を成し遂げた。

県立一中では打力のよかった田中実一塁手（明大）と遊撃手で抜群の動きを見せた藤井信義選手（三高－東大）がかなめとなってチームを支えていた。また、高知工には後に社会人野球で活躍、県野球審判協会長を務めた故北村正選手（旧姓久保田）がいた。

〔県立一中〕

投	片岡義重
捕	関口徳郎
一	田中　実
二	倉山釜二
三	弘末芳世
遊	藤井信義
左	大野義重
中	森　直孝
右	寺田虎男

早大からコーチを招き技量向上図る

この年には県内で野球技術を向上させようという機運が高まり、早大出身者のあっせんで県立一中、高知商、高知工ら３校が一致して早大からコーチを招き、４月に県下では初めての野球勉強会を開いた。

来高したのは大正７年の同大学渡比メンバーにも選ばれた伊藤十郎投手と中村正雄二塁手の２人。５日間にわたって天気のよい日は実技。雨の日は理論やルールを中心にして３校選手がともに勉強、熱心に指導を受けたため、本県の野球も遅まきながら向上のきざしが見え、この年を境に一段とレベルアップした。

一方、大正８年には野球競技が一段と盛んになり、さまざまの大会が催された。８月には第二回県下野球大会が開かれ、５チームが参加した。試合は前年に続いてまたも県立一中が優勝。他校を圧倒するずば抜けた強さを見せて一中の黄金時代を築いた。

⚾県内で初めて遠征チームと対戦

10月に入ると「ＮＵＫ」という日本運動具会社（東京）の所属チームが来高、県内チームと手合わせした。これは当時、本町に「まからずや」という運動具を販売していた店があったが、その店の水野さん（元帯屋町、バッグショップとらや）が招いたものだった。同チームには安藤忍遊撃手（明大）内田勝三三塁手（同）らがいて国内では技量抜群のチームだった。

第１日は36－０で高知商が完敗。第２日は33－０で高知工も大敗。第３日には13－１で県立一中も敗れた。この対戦で県立一中は田中実選手が猛然と滑り込んでやっと一矢を報いたのみで戦力に格段の差があった。県立一中には台湾からの転校生で、本県選手では初めてカーブを投げたといわれる竹内寿臣投手がいた。

この試合を記念して日本運動具会社から優勝旗の寄贈があり、関係者で協議した結果、県立一中、高知商、高知工の３チームで春、秋にリーグ戦を行うことになった。第１回は11月に一中校庭で開かれ総当たり戦の末、常勝を誇る県立一中がまたも優勝した。

また、10月17日には県立三中（現安芸高）でも野球大会が行われ、10月19日には一中グラウンドで第一回高知少年野球大会も開かれている。

大正9年（1920年）

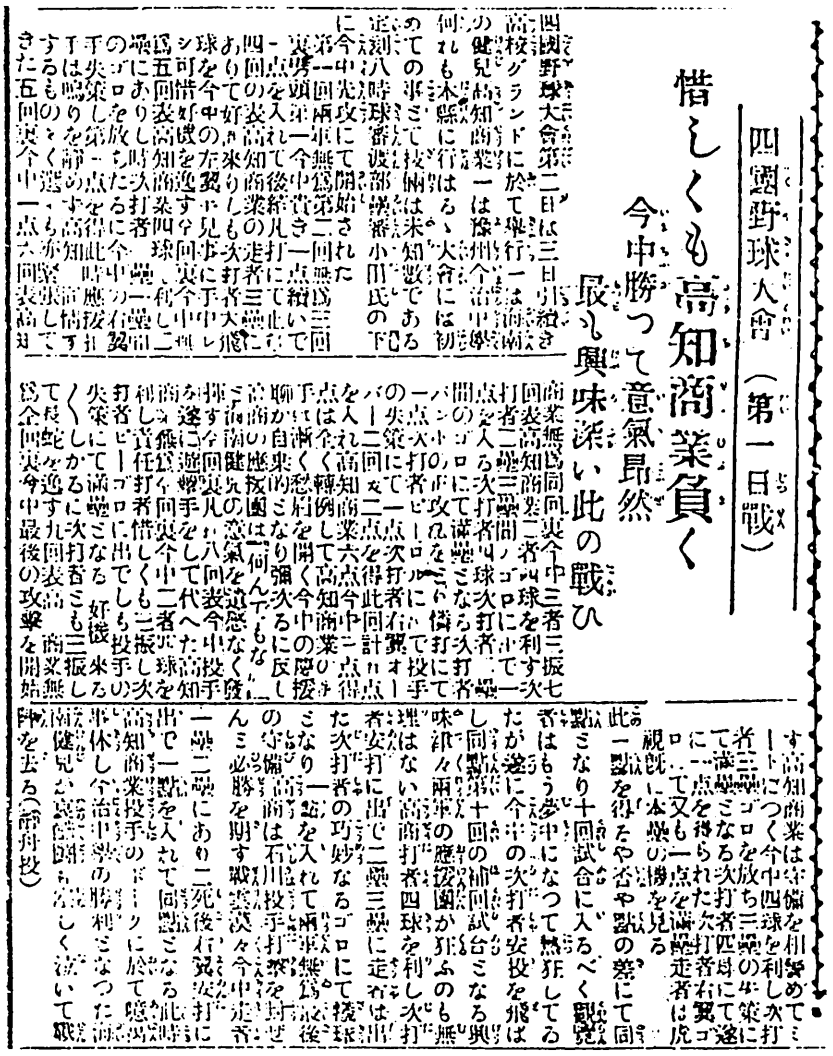
高知商、県勢の先べんを切り四国大会へ

大正９年には高知商が四国大会に初参加した。試合は初戦で敗退したが、高知勢の登場で四国大会は４県チームがすべて顔をそろえ意義深い年となった。

この時代に県内で野球のできるグラウンドを持っていたのは県立一中だけだった。四国大会へ出場を踏み切った高知商はもとより高知工も校庭が狭くて野球ができる状態ではなかった。

このため、高知商は朝倉の連隊と交渉。連隊後方の練兵場で演習のないときに、野球の練習に使用させてもらっていた。

補欠選手がバックネットを巻いてかつぎ、選手は道具を持って電車で朝倉まで通っていた。しかし、練習場は草が多くてボール探しに時間がかかった。また、朝倉へ行くのに約１時間かかり、午後３時に授業が終わっても練習を始めるのが午後４時。２時間練習して帰ると午後７時ごろになった。春や夏は日が長いが、冬場は日が短くて練習時間も少なくなり、電車賃にも困る状態だったという。



四國野球大會（第一日戰）

惜しくも高知商業負く

今中勝つて意氣昂然

最も興味深い此の戰ひ

四国大会西部予選に初参加した高知商の健闘ぶりを伝えた新聞記事（大正９年８月４日付の海南新聞）

㊐丸の内に高知公園北球場が完成

そんな折、現在の高知農が高知市丸ノ内の丸の内高の所にあったが、高知農が移転、県立高等女学校が移ることになった。だが高知農の実習地は荒れたまま放置されていた。これに目をつけた高知工が整地を始め、そのうち高知商野球部も応援して整地を手伝った。

現在、高知市丸ノ内にある県保健衛生総合庁舎一帯で、この広場は利用価値が高くここで盛んに野球が行われるようになった。すべり山は格好の観覧席に早替わりして人々が詰めかけ「高知公園北球場」と呼ばれ、長い間ファンに親しまれた。

㊐秀島判事のコーチで高知商台頭

こんな窮状時代の高知商にとってなによりも幸いしたのは当時、高知地裁に勤務していた秀島敏行判事のコーチを受けたことだった。一高の名捕手だった人で、高知商の教壇にも立っていた。この秀島コーチの指導で石川広一投手、森国宗義捕手、川村晋一郎遊撃手らがめきめきと技量を上げ、悲願の打倒一中を目前にしていた。

その悲願達成は意外と早く訪れた。大正9年の4月22日から4日間、県立一中、高知商、高知工の3校で恒例の春季新人リーグ戦が行われたが、高知商は全勝優勝を成し遂げた。王者の県立一中は高知商、高知工にも連敗。野球部発足以来、常勝を誇っていた県立一中は新人戦ながら初の黒星を喫し無念の敗退をした。

この敗戦が「1920年、時は卯月の末つ方」で有名な黒田進（歌手、楠繁夫）が即興して作詩、作曲したといわれる応援歌を生み出した。

〔高知商〕	〔県立一中〕
投　石川広一	投　森　直孝
捕　森国宗義	捕　坂本　満
一　渡辺弥之助	一　片岡四郎
二　毛利一男	二　杉本民三郎
三　井上和太郎	三　岸本道雄
遊　川村晋一郎	遊　竹内寿俊
左　林　金道	左　柳原範夫
中　岡本梅吉	中　依光　昇
右　浜田	右　富永栄三郎

一方、この敗戦を機に県立一中は柳原範夫左翼手（元柳原病院長）らが雪辱に闘志を燃やし、夏の本番に備え必死の猛練習に明け暮れた。応援団も黒田進が作った応援歌を全校生徒が一丸となって雨天体操場で高唱。全校一致しての反撃態勢は意気盛んだった。

決戦の日は7月29日にやって来た。高知新聞社主催の県下野球大会で両雄が再び対決したが、高知商は石川広一投手が速球で一中打線を抑えて有利に試合を進めた。

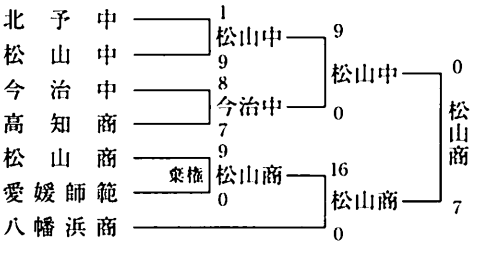
9回裏の大詰めを迎えて県立一中は依光昇中堅手が雨天体操場をオーバーする左越え本塁打を放って1点差に肉薄。なおも二死一、三塁と攻め込んだ。一打同点か、逆転の好機と思われたが、一塁走者の片岡四郎選手が機をうかがって二盗に出た。これに高知商の森国宗義捕手が素晴らしい送球を見せ、受けた川村晋一郎遊撃手が片岡にタッチしアウト、あっけない幕切れとなった。

高知商が四国大会西部予選へ初出場

第3回県下野球大会で優勝した高知商は勢いに乗じて四国大会に初参加することになった。井上勝喜高知新聞記者、西村豊吉野球部長とともに高知から神戸へ船で出帆。神戸で船を乗り換えて8月2日に高浜港へ上陸。大会開催地の松山市へ乗り込んだ。当時松山へ行くには遠回りして四国山脈をう回。うそのような交通アクセスがとられていた。

この年の第6回全国中等学校優勝野球四国大会は例年と異なり、西部予選（8月1～4日・松山高）東部予選（8月3～6日・高松栗林公園）の2地区に分かれて予選が行われた。

第6回全国中等学校優勝野球大会四国予選（西部予選）
（大正9年8月1～4日・松山高校）



これは大正７年の四国大会決勝戦で丸亀中のスパイク事件が起き、香川、愛媛の対立感情が極めて険悪となり、これを心配した両県が協議。今大会は東西の２地区で予選を行い、両地区の優勝チームを西宮市鳴尾球場で対戦させる。また、今年以後は前年度優勝校の県庁所在地で大会を開催するという規定を設けた。

これに基づいて大正９年は東部予選に香川と徳島の９校、西部予選は愛媛と高知の７校が出場して予選大会を開催。両予選の優勝校、松山商と香川商が８月10日、鳴尾球場で第２次予選を行って８－１で松山商が優勝、２年連続の甲子園出場を決めた。このときの松山商には藤本定義選手が２年生ながら三塁手として出場、活躍して優勝に貢献していた。

㉛高知商、接戦繰り広げボークで惜敗

１回戦で今治中と対戦した高知商は８月３日、松山高校グラウンドで折からのにわか雨にもめげず、東予の雄、今治中と延長10回の接戦を展開。最後にはボークがあって７－８で今治中に惜敗した。

ゲームは初陣高知商が健闘、中盤で追いつ追われつの大乱戦となった。先手を取ったのは今治中。３回に四球で出た徳永英が秦の遊ゴロ失の間に生還。さらに谷口の左越え三塁打で２点を先行した。

このあと、５回は互いに１点ずつを取ったあと、高知商は７回に猛攻。森国が四球、井上は三塁強襲安打、続く渡辺の遊ゴロ失で２人が生還。さらに川村が四球、浜田は二ゴロ失、毛利の投ゴロ失と敵失に乗じてこの回５点を奪って一時は６－３と逆転した。だが今治中も９回になって２失策と四球で一死満塁とし、田中の押し出しの四球、徳永優の安打で３点を返して同点、延長戦に持ち込んだ。

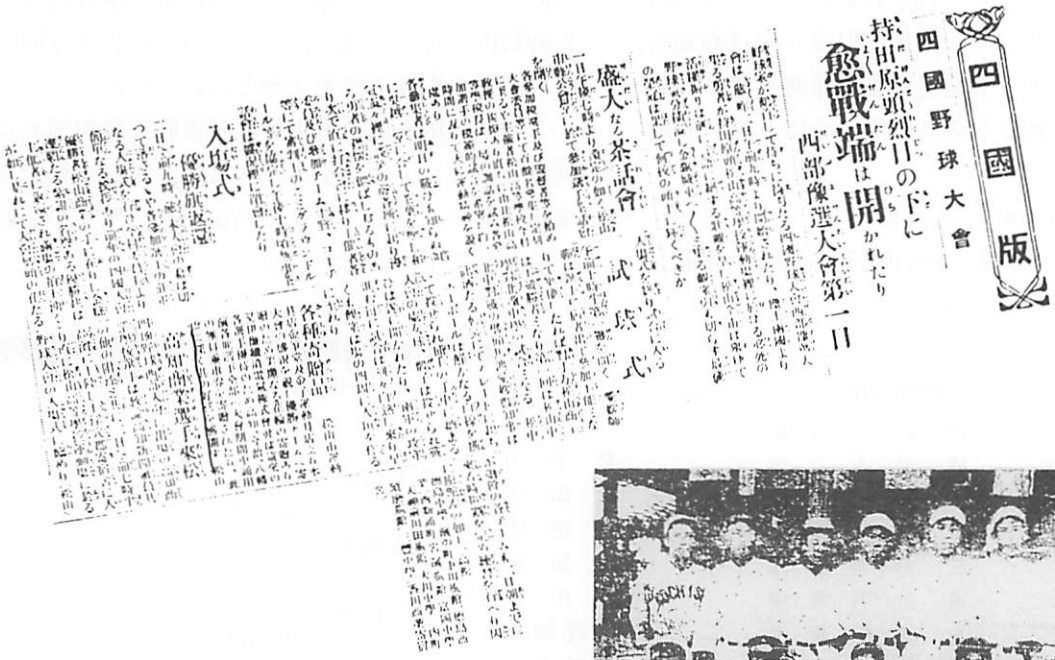
初陣ながら健闘する高知商は10回、山崎が四球、森国は安打、井上の送りバントで二、三塁とし敵失に乗じて１点を取った。しかし、粘る今治中はその裏、武田が安打、徳永英は四球で出た二死一、二塁から秦が中前打して同点。なおも三塁に走者を置いて高知商・石川投手のボークがあって８－７と逆転勝ちした。高知商は２年前の優勝校、今治中と互角に戦い２度にわたってリードしながら初陣の硬さが出て優位を守り切れなかった。

◆第６回全国中等学校優勝野球大会四国西部予選（Ｔ9.8.1～4）

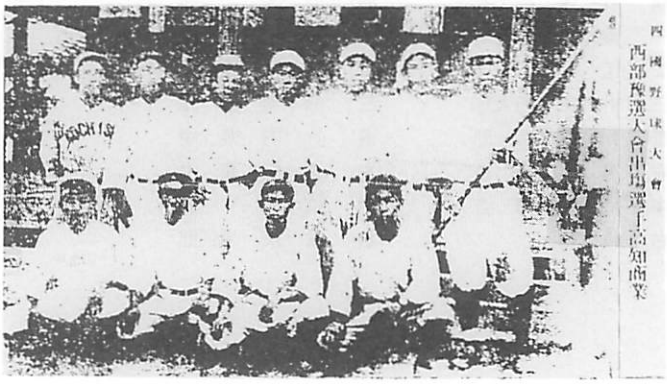
［一回戦］

高知商	000	010	500	1	7		
今治中	002	010	003	2X	8	（延長10回）	

（高）石川－森国　（今）田中－秦


四國版
四國野球大會
持田原頭烈日の下に
愈戰端は開かれたり
西部豫選大會第一日
盛大なる茶話會
試球式
入場式
各種競技

（大正９年８月３日付の朝日新聞四国版）


四國野球大會
西部豫選大會出場選手高知商業

高知工、試合の朝松山入りし大敗

第７回全国中等学校優勝野球四国大会は８月３日から６日までの４日間、松山高校と松山中の２会場に12チームが参加して開幕。県勢からは前年の高知商に代わって高知工が初参加した。

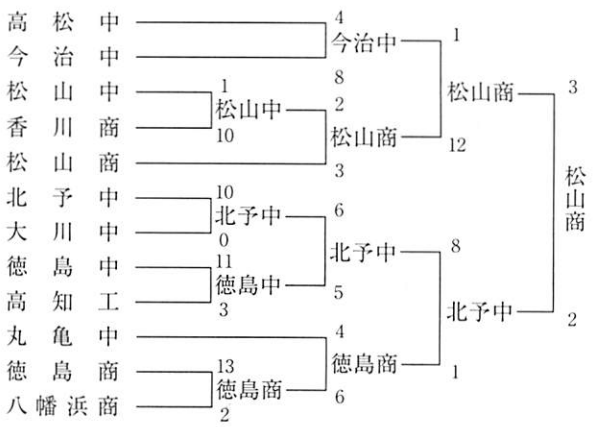
大会は当初、15チームが参加予定だったが、高知商、富岡中、脇町中が棄権したため12校になった。決勝は愛媛勢同士の争いとなり、松山商が３－２で北予中を下し３年連続の優勝を飾った。

四国大会初出場の高知工は高知からいったん船で神戸へ。そこで船を乗り換え３日がかりで試合当日の８月３日、午前７時半に高浜港へ上陸した。

試合は１回戦だけは松山高校、松山中の２会場を使って開かれ、高知工は松山中校庭で徳島中と対戦した。高知工の長尾勢虎投手は速球とカーブに威力があったが、なにせ試合当日に松山入りしたため疲労ぎみ。船旅の疲れで制球を乱し、球威も欠いて徳島中に11－３で大敗した。

徳島中は天羽－牧のバッテリーがいて、森新遊撃手、村田一塁手も好守備を見せて初陣の高知工に大差をつけた。

第7回全国中等学校優勝野球大会四国予選
（大正10年8月3～7日・松山高校）



〔高知工〕

投	長尾勢虎
捕	栗原四郎
一	沢田　進
二	朝倉慶重
三	大倉　要
遊	近森英樹
左	青木　茂
中	竹村定吉
右	戸田　正

◆第７回全国中等学校優勝野球大会四国予選（T10.8.3～7）
［一回戦］

徳島中	１００	０１３	６	11	
高知工	０１０	０２０	０	３	（７回コールド）

（徳）天羽－牧　（高）長尾－栗生

軍隊にも野球が浸透

大正11年になると野球の普及は一般、学生チームだけではなく軍律厳しい帝国陸海軍にも浸透。ベースボールとは縁遠いと思われた兵隊さんが学生たちと交歓試合を繰り広げ、軍務の余暇に銃をバットに持ち替えてしばし野球のだいご味に浸っていた。

この年、５月14日には城東中グラウンドで朝倉44連隊と高知商の親善野球試合が開かれ、高知商が17－０で快勝した。弾打ちが本家の兵隊さんチームも球打ちは苦手だったのか、一矢も報えず大敗した。

さらに10月14日には折から土佐湾入りしていた海軍比叡乗組員が城東中グラウンドで県内中学チームと親善野球試合を行った。こちらの水兵さんチームは野球のうまい、自信のある人が多かったのか、２日間にわたった試合で、25－５で高知工、２－１で高知商、９－４で城東中に３連勝。挑戦相手を募った自信のほどを見せて意気揚々とアンカーを揚げて土佐湾を去って行った。

⚾一中は城東中に、城北中も誕生

一方、大正11年の高知県内は中学校の新設や校名変更、学級編成変えをする学校が多かった。

この年の４月、学制改革があって明治の末に廃校となった県立第二中学に代わる新たな中学校が増設され、県立城北中が誕生。また、明治32年９月から県民に親しまれていた県立第一中学がこの年４月から県立城東中学と校名が改称された。一方、高知商もこの年４月から本科、予科の名称を廃止して５年制の学級に編成された。

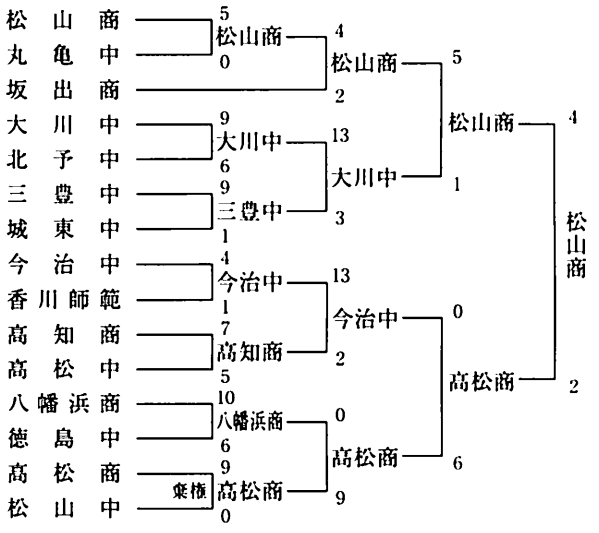
県勢は２校が出場、高知商は初白星飾る

第８回全国中等学校優勝野球四国大会は８月１日から５日まで松山高校、松山商の２会場に15校が参加して開幕。松山商校庭での松山中－高松商戦は後に語り草となった“水攻め”事件が起きる騒動もあったが、大会は連日して４、５万の大観衆で埋まり空前のにぎわいを見せた。

決勝戦は藤本定義投手（早大－元巨人－阪神監督）を擁した松山商が藤本の14三振を奪う快投で高松商を４－２で下し、４年連続の優勝を果たした。

県勢は四国大会初参加の城東中と２年ぶりの高知商が出場した。城東中は７月の県下大会で高知工と決勝戦で対決。大接戦となったが高知工の棄権で優勝。勢いに乗って四国大会に乗り込んだ。

第8回全国中等学校優勝野球大会四国予選
（大正11年8月1～5日・松山高校庭）



だが1回戦で大会出場4度目の三豊中と対戦。投手、守備力の差が出て三豊中に9－1、7回コールドで大敗した。

三豊中は2回に一死一、三塁から城東中内野の3連失。さらに投手暴投で二人がかえりこの回5点を先行。3回には一死満塁から矢倉の遊撃右を抜く安打、投手ボークなどでこの回4点を挙げ前半で勝負を決めた。

同じ1回戦の高知商－高松中は高知商が大健闘。追いつ追われつの大接戦から若い選手が多く硬くなった高松中を7－5で下し、四国大会で初白星を飾った。

試合は高知商が1回に小笠原が四球、次打者の内野ゴロで二進したあと、一死から佐藤の三塁内野安打で1点を先行した。しかし、高松中は2回に2点。4、7回に1点ずつを挙げて反撃。高知商も2、4、5回に1点ずつと小刻みに加点。追いつ追われつのシーソーゲームを展開した。

その後、高知商は8回に1点を追加。さらに9回には小笠原が中前打、浜口は四球で出塁、佐藤の三ゴロで小笠原は三封されたが、一死から細川が中越えに長打して2点。その裏、高松中の反撃を1点に抑え逃げ切った。

2回戦の今治中－高知商は高知商にとっては二年前の雪辱を果たす因縁試合だったが、愛媛では力のある今治中にまたも屈し、13－2で敗退した。

大敗したが前半は接戦だった。今治中は1回に村瀬が四球、稲田の遊ゴロ失の間に村瀬がかえって無安打で1点を先行。高知商も4回に四球の小笠原が二、三盗し、佐藤の遊ゴロで小笠原がホームを突いて同点。5回までは今治中が稲田、高知商も左腕の岡添が好投して1－1の接戦だった。

しかし、投打に勝る今治中は6回に1点を加え、8回に岡添投手の疲れに乗じて猛攻。2安打、1失策でつかんだ無死満塁から秦の左中間三塁打、捕逸、山田の遊越え安打、村瀬の遊ゴロ失などで大量7点。さらに9回には無死二、三塁から神村の遊ゴロ、正岡の三遊間安打、山田のバントヒットで駄目押しの4点を加え大差をつけた。

◆第8回全国中等学校優勝野球大会四国予選（T11.8.1～5）

［一回戦］

三豊中	054	000	0	9	
城東中	000	001	0	1	（7回コールド）

（三）黒田－森岡　（城）関、森本－徳橋、関

高知商	110	110	012	7	
高松中	020	100	101	5	

（高）岡添－浜口　（高松）木村－相原

［二回戦］

今治中	100	001	074	13	
高知商	000	100	010	2	

（今）稲田－山田　（高）岡添－浜口

〔城東中〕

投	関　　徹
捕	徳橋三男
一	横川源太郎
二	森川真俊
三	今村与志郎
遊	杉本民三郎
左	佐藤道三
中	松村栄馬
右	近森増吉

〔高知商〕

投	岡添　理
捕	浜口
一	細川義久
二	小笠原
三	岡田
遊	川沢　亘
左	町田叡光
中	佐藤
右	村田謙一

大正12年（1923年）

2年ぶりの高知工、またも初戦敗退

この年の3月31日、高知工業学校は県に移管され、名称を県立高知工業学校と改称した。県立校となり気分一新した高知工は再出発を期して2年ぶりに四国大会に出たが、またも初戦敗退、白星は飾れなかった。

また、9月に開かれた県下野球大会では田中実監督の率いる城東中が優勝した。

⚾高知工、3安打で今治中に完敗

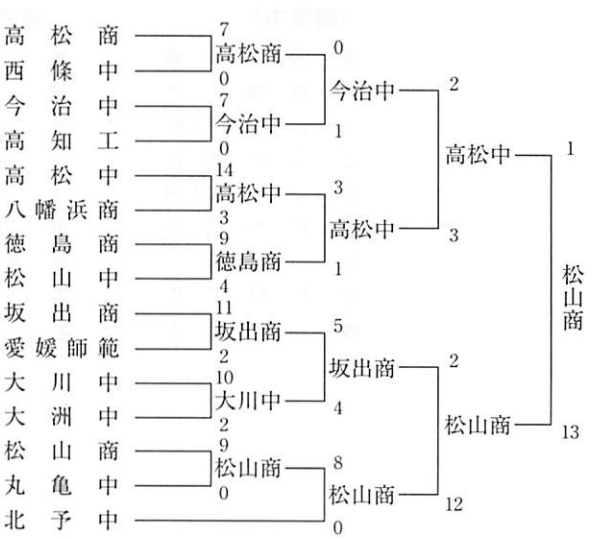
大正12年の全国中等学校優勝野球四国大会は8月1日から5日まで松山高校グラウンドに15校が参加して開幕。決勝戦は高松中と松山商で争われ13－1で松山商が快勝、5年連続の優勝を飾った。

2年ぶりに四国大会に臨んだ高知工は1回戦で今治中と対戦、戦力の違いもあって今治中に7－0、7回コールドで敗退した。

力のある今治中は1回に平田が左前打、一死から種橋、越智が四球で出て満塁。山田の中前打で二者がかえって先行。6回には二死から四球の石丸が二盗、友田も四球で出たあと、松本の遊ゴロ失の間に二人が生還。続く平田の2ゴロ失で松本もかえってこの回に3点。さらに7回には種橋が遊ゴロ、一塁悪投の間に二進、越智が投越え安打した一死後に正岡の一打は三ゴロ失となってまたも二人がかえり、7点目を挙げてコールド勝ちした。

敗れた高知工は今治中の越智投手にわずか3安打に抑えられ、11三振を喫して一矢も報えなかった。

第9回全国中等学校優勝野球大会四国予選
（大正12年8月1～5日・松山高校庭）



◆第9回全国中等学校優勝野球大会四国予選
（T12.8.1～5）

［一回戦］

高知工	0	0	0	0	0	0	0
今治中	2	0	0	0	0	3	2X	7

（7回コールド）

（高）清水－朝倉　（今）越智－山田

〔高知工〕

投　清水　梢
捕　朝倉慶重
一　島崎
二　吉村晴喜
三　長谷川　一
遊　小島誠三
左　川久保友一
中　西川
右　北村　連

徳島での大会に参加、試合せずに帰高

この年の３月29日、徳島県野球協会主催の近県中等学校野球大会が徳島商業校庭で開かれ、高知から城東中、高知商が参加した。出場校は徳島、香川、大阪が各２校、兵庫は１校、これに高知の２校を加え９校だった。

抽選会は３月28日に公園千秋閣で行われたが、高知の出場２校は１回戦で高知同士が顔を合わさないよう大会役員に頼んだ。主催者側もまさかと思ってシードせずに抽選すると、意外や高知同士が１回戦で対戦することになった。

本県側が承服できないと抗議。「試合をせずに帰る」と言い出すと、徳島の主催者側はしきりと慰留、入場式だけは出るように説得した。入場式に出れば不服ながらも試合をやってくれるというもくろみがあったらしい。ところが大会当日、城東中、高知商チームは入場式でダイヤモンドを一周すると、県勢は試合をせずさっさと帰高。徳島側は高知のイゴッソウぶりにあっけにとられたという逸話が残っている。

⚾選抜大会が開幕、甲子園球場も完成

また、この年は４月に全国選抜中等学校野球大会が産声を上げ、７月31日には６万人収容の大スタジアム、甲子園球場が完成。四国内では９月12日、香川県に四国一を誇る屋島球場も完成。全国的に野球の隆盛と同時に施設面での充実、近代化が進んできた。

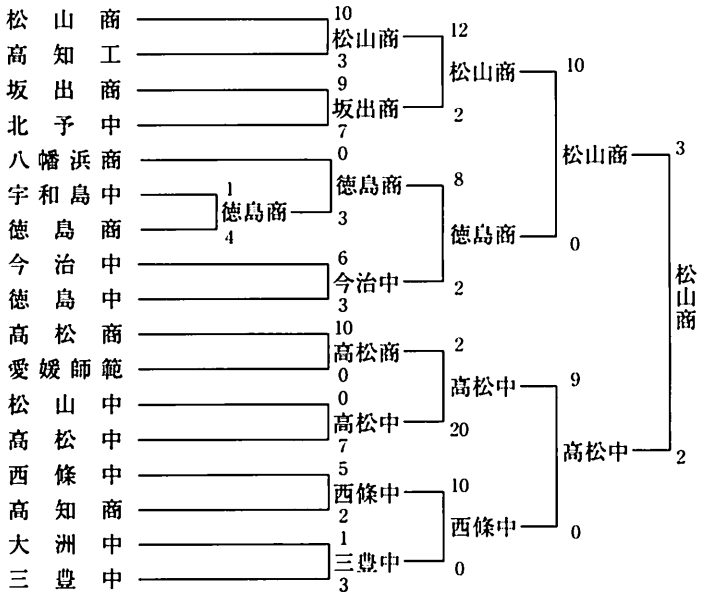
高知商、高知工出場するも初戦で敗退

夏の甲子園につながる第10回全国中等学校優勝野球四国大会は８月１日から５日まで松山高校グラウンドに17校が参加して開かれた。高知からは高知商、高知工の２校が出場したが、この年の県勢は松山へは海路遠征のコースをとらず、高知商は７月28日、高知工は29日にともに陸路、自動車で松山入りした。

高知工、高知商はともに１回戦は不戦勝。２回戦で高知工は優勝した松山商と対戦したが、序盤での善戦もむなしく後半に大差をつけられ、松山商に10－３、７回コールドで敗退した。

力のある松山商は１回、内野安打の中川が二盗、次打者槙の遊ゴロで一挙本塁を突いて先制。２回は一死から３連続失策で満塁とし中川の三ゴロ、さらに槙、森の連続四球で加点し３－０とした。

第10回全国中等学校優勝野球大会四国予選
（大正13年8月1～5日・松山高校庭）



だが高知工も大敵を恐れず、４回に朝倉が左へ三塁打、続く北村の遊ゴロが一塁悪送球となって１点。一死から高野の四球を足場に二、三塁と詰め寄り、島崎の右前打で二者がかえって同点とすると場内はざわめいた。

しかし、力量では数段上回る松山商はその裏、内野失と２四球で満塁とし森の遊ゴロ失で１点。二死後に高須賀の左越え三塁打が出てこの回一挙に４点。さらに７回は遊失のあと２四球で満塁と詰め寄り、槙の押し出しの四球、一死から森本も死球、池内は遊ゴロ失で出て３点を追加。高知工・北村投手の乱れと内野ミスに乗じて無安打で追加点を奪い７回で勝負を決めた。

高知工は松山商の先発、中村に代わって４回から登板した森本の立ち上がりを捕らえ一時は同点とした。だがその後立ち直った森本に抑えられ、内野が９失策と乱れて大敗を喫した。

高知商－西條中は高知商が前半に２点を先行し有利に試合を運んだ。だが４回以降に山岡投手が８四死球を出して崩れ、西條中に５－２と逆転負けした。

敗れたが序盤は高知商のペースだった。３回に沢本が四球、松本は右中間三塁打して先制。５回は国沢の遊越え安打、一死から亀井の右中間二塁打で２点目を追加。守っては山岡投手が３回まで西條中を三者凡退に抑え、快勝のペースだった。

ところが西條中は４回、渡辺が四球で出て投手けん制悪送球で二進、二死から三盗に成功したあと、捕逸を得て無安打で１点を返した。高知商は山岡投手が一人相撲を取り、これを境にピッチングが乱れ出した。この機を捕らえた西條中は６回、先頭の渡辺が死球、戸田は四球を得たあと、渡辺が三盗し投手悪送球を誘って１点。さらに松本が四球、川又の中前打で二者が生還。このあと内野ゴロで走者がかえり、４点を取って逆転に成功した。

この一戦、高知商の７安打に対し、西條中はわずか２安打で勝利を勝ち取った。

夏の大会が終わったあと、９月に県下野球大会が開かれ、高知師範、高知工、安芸中、高知商、城東中の５校が参加。決勝戦は高知商と城東中で争われ、高知商が２－１で優勝した。

◆第10回全国中等学校優勝野球大会四国予選（Ｔ13.8.1～4）
［二回戦］

高知工	０００	３００	０	3	
松山商	１２０	４００	3X	10	（７回コールド）

（高）北村－川久保　（松）中村、森本－木口

高知商	００１	０１０	０００	2	
西條中	０００	１０４	００×	5	

（高）山岡－亀井　（西）川又－戸田

〔高知工〕
投　北村　連
捕　川久保友一
一　島崎
二　吉村晴喜
三　島内義明
遊　朝倉慶重
左　高野清信
中　公文英吉
右　入交義幸

〔高知商〕
投　山岡
捕　亀井
一　前田
二　国沢　渉
三　土居駿夫
遊　松本政春
左　有安
中　小松
右　沢本

県勢は３校が出場、城東中は８強へ

この年の初夏、当時最強を誇っていた大毎球団と関西学院チームが来高。両チームが高知高で対戦、最高レベルのゲームを県民に披露してくれた。この折、県内中学も選抜チームを結成して関西学院チームと対戦し善戦、自信をつけた勢いで夏の四国大会に乗り込んだ。

大正14年の第11回全国中等学校優勝野球四国大会は８月１日から５日まで松山高校グラウンドに18校が参加して開かれた。

県勢はこれまで最多の城東中、高知商、高知工の３校が出場した。城東中はこの年、関西学院チームを迎えた際、高知選抜チームの投手として活躍した大石良雄投手が自信をつけての参加だった。森本真俊捕手も選抜軍のトップ打者として好打を見せ、一塁は田村金之助（現姓千頭）、二塁は谷山登、三塁は楠瀬真彦、遊撃手は玉真達雄（台北帝大－元土佐高教諭・故人）らがいた。

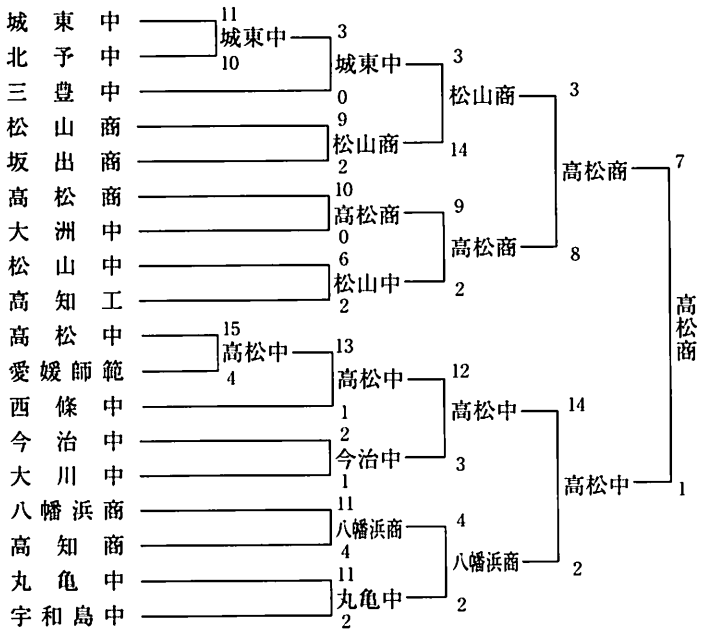
中でも前年９月に台湾から転校してきた玉真遊撃手は俊敏で打力もあり、県下一の遊撃手と定評があった。このころ、選手はユニホームに学生帽をかぶっていたが、城東中は松山遠征で学校側が野球帽を新調してくれての出場だった。

また、高知商は前年の経験者が６人も卒業し、新人の多いチームに若返っていた。この年は前年に遊撃手だった松本が投手に、二塁手だった国沢が遊撃に回り、土居三塁手だけはそのまま残っていた。

一方、高知工は前年の川久保捕手、島内三塁手、高野左翼手、公文中堅手が残っており、投手には山登を起用、旧チームの選手が多いだけに四国大会では期待されていた。

四国大会で活躍、２勝を挙げ８強入りした城東中選手。（前列左より大石良雄、新名野球部長、藤井コーチ、玉真達雄、中列は森本真俊、田村金之助、楠瀬直彦、谷山登、後列は青木勲、細木八尋、江元正秋、横矢重和選手）

第11回全国中等学校優勝野球大会四国予選
（大正14年8月1～6日・松山高校庭）



⑪城東中、打撃戦から７回に大逆転

１回戦の開幕試合、城東中－北予中は両校ともに10安打ずつの打撃戦となり、追いつ追われつの大乱戦を展開。終盤近くで大逆転した城東中が北予中の猛反撃をかわし、11－10で逃げ切った。

ゲームは前半が北予中、後半は城東中ペースの戦いだった。北予中は１回裏に松本の二塁打を足場に四球、３失策を絡めて３点を先行。２、５回にも１点ずつを加え、５回を終わって５－１と優位に立っていた。

しかし、城東中は６回に２失策と谷山の三塁打で２点。７回には５安打に４四球、３失策を織り込んで一挙８点を取り大逆転した。

追撃する北予中は７回裏に山本の三塁打、織田の二塁打に失策で２点。８回には２安打と３失策で３点を返し猛追撃したが、攻勢もあと一歩及ばなかった。北予中の矢野投手は９四死球を出し、守りも10失策と乱れたのが命取りとなった。

⑪城東大石、三豊中を５安打に完封

２回戦の三豊中－城東中は初戦を勝ち抜いた城東中が勢いに乗って三豊中を圧倒。大石投手も５安打完封と好投し、３－０で三豊中に快勝した。

今大会快調の城東中は４回、１安打に３失策を絡めて先制。７回には３安打に死球、失策を織り込んで２点を追加。守っては大石投手が５安打を奪われながらも要所を締めて完封した。

敗れた三豊中は１回に豊田が右中間に三塁打しながら投手けん制で憤死。５回には成行が左へ二塁打しながら二、三塁間で挟殺されるまずい走塁があって逸機。６回の二死満塁もものにできず一矢も報えなかった。

松山中－高知工は投打に上回る松山中が中盤で猛攻、６－２で高知工を退けた。

ゲームは初回に両チームが１点ずつを取り合い序盤戦は互角だった。だが力では一日の長のある松山中は５回に３安打に四球、１失策を絡めて一挙に４点を奪って中盤で勝負を決めた。６回は互いに１点ずつを取り合ったが、松山中が９安打、高知工は３安打で、攻撃力でも松山中が数段上手だった。

高知商－八幡浜商は前半に高知商が食い下がり５－４と僅差で健闘した。しかし、松本投手が後半へかけて疲れを見せて単調。これを攻め込んだ八幡浜商は11安打に８四死球を絡め、11－４で高知商に大勝した。

前半は八幡浜商が初回に３点、２回に２点を先行。追撃する高知商も３、４回に２点ずつを取り、一時は５－４と詰め寄った。だが八幡浜商は５回の好機に高橋の三塁打と投手暴投で２点を追加。７、８回にも長打攻勢を見せて２点ずつを取り差を広げた。

反撃する高知商も７、８回に５安打を放ったが、得点に結びつかず追加点は取れなかった。

⑪今大会健闘の城東、松山商に屈す

準々決勝の松山商－城東中は今大会活躍した城東中も春の選抜優勝校で試合巧者の松山商に歯が立たず、14－３で大敗した。

試合運びのうまい松山商は初回にわずか１安打ながら２四球、２失策を絡めて早々と３点を先制。２回は２点、３回は１点を加え、前半で大勢を決めた。波に乗ると、５回には森本の右越え二塁打などで２点。さらに９回には中村の右越え三塁打など３安打、４失策で一挙６点を取って城東中を引き離した。

大敗した城東中は２回に３失策と犠打で２点。９

回には一死二、三塁から捕逸で１点を返したが、松山商の森本投手に４安打に抑えられ、11三振を奪われて力量差を見せつけられた。

⑪県下大会で玉真がサヨナラ本塁打

夏の四国大会終了後、９月25、27の２日間、県下野球大会がこれまでの城東中校庭から会場を高知高校グラウンドに移して開かれた。

今大会は安芸中が不参加だったが、城北中（現小津高）城東商（現高知高）が初参加。これに城東中、高知工、高知商、高知師範の６校で試合が行われた。

決勝戦は高知工ー城東中の間で争われ、終盤に高知工が追い上げて５－５の延長戦となった。だが夏の四国大会で活躍、自信をつけた城東中は10回裏に一死二、三塁から玉真達雄選手が左越えに劇的な３点本塁打を放ち、８－５でサヨナラ勝ちした。

◆第11回全国中等学校優勝野球大会四国予選（T14.8.1～6）

［一回戦］

城東中	001	002	800	11
北予中	310	010	230	10

（城）大石、玉真ー森本　（北）矢野ー瀧

［二回戦］

三豊中	000	000	000	0
城東中	000	100	20×	3

（三）木村ー横山　（城）大石ー森本

松山中	000	141	000	6
高知工	000	101	000	2

（松）服部ー高市　（高）山登ー川久保

高知商	002	200	000	4
八幡浜商	320	020	31×	11

（高）松本ー宮渕　（八）小松ー高橋

［準々決勝］

松山商	321	020	006	14
城東中	020	000	001	3

（松）森本ー室谷　（城）大石ー森本

〔城東中〕

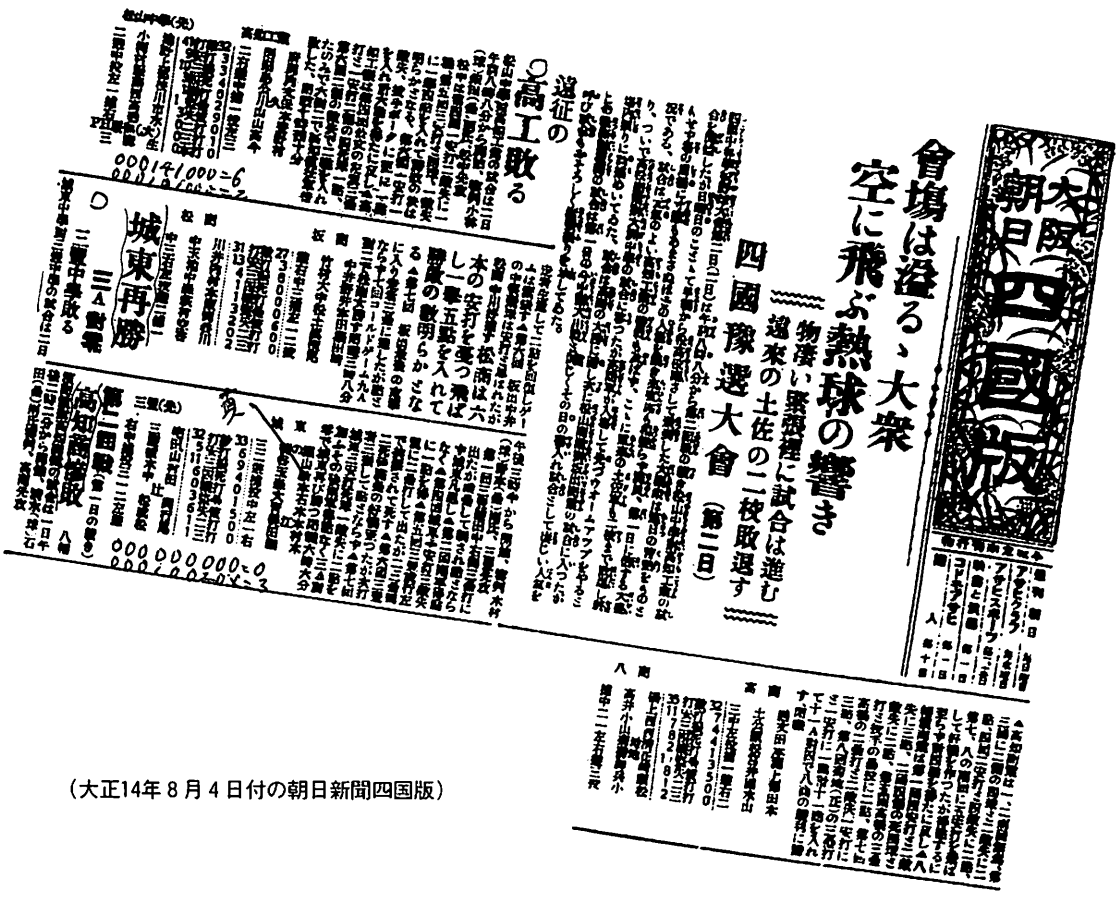
投	大石良雄
捕	森本真俊
一	田村金之助
二	谷山　登
三	楠瀬直彦
遊	玉真達雄
左	江元正秋
中	青木　勲
右	細木八尋

〔高知商〕

投	松本政春
捕	山本一男
一	井上寿吉
二	内田一郎
三	土居駿夫
遊	国沢　渉
左	水田一男
中	公文重男
右	原田忠夫

〔高知工〕

投	山登勝巳
捕	川久保友一
一	山本利得
二	別府善治
三	今村幸喜
遊	島内義明
左	高野清信
中	公文英吉
右	則岡定雄


大阪朝日　四國版

會場は溢るゝ大衆
空に飛ぶ熱球の響き

物凄い熱戦に試合は進む
遠來の土佐の二校敗退す

四國隊選大會（第二日）

高工の敗る

遠征の

城東再勝

三A戰

（大正14年８月４日付の朝日新聞四国版）